

生前に刊行された日記は、編集、されていたことが明らかになり、死後「嘘つき」という評価が定着したアナイス・ニン。片や一九世紀後半のパリの風俗や文壇事情を、日記のなかで赤裸々に描いたゴンクール兄弟。両者の日記から、男と女の性愛に対する意識の違いを読み解く。

日記を読むために必要なリテラシーとは

一九〇三年にフランスで生まれた作家のアナイス・ニンは、一一歳から六〇年以上にわたって日記を書き続けました。一九七七年に七三歳で亡くなるまでの四万ページ近い日記が初めて刊行されたのは、晩年の一九六六年春、六三歳のときでした。ニューヨークの大手出版社ハート・ブレイス社から出版されたその日記は、現在「編集版」と呼ばれています。なぜわざわざ「編集版」という文言が付されているのか。それは彼女の死後、『ヘンリー&ジュン』などの「無削除版」が刊行されたからです。

アナイスの生前に出た日記は、「作者自身によって『編集』されていた」ことが明らかになったのです。こうした経緯は、日記というものの

本質を突いた出来事と言えるでしょう。

つまり、もしアナイスが日記の原本を焼き捨てていたとしたら、「編集版」の記述が唯一の真実として語り継がれていたかもしれない。日記のどこまでが事実で、どこからが文学作品なのか、その現実と虚構の境目は作者以外の誰にもわからないのです。

では、日記に書かれた虚実を見極める「日記リテラシー」を身につけるには、どうすればいいのか。二千夜もの夢を記録し続け、『夢の操縦法』という本を著した一九世紀の中国文学研究者エルヴェ・ド・サン＝ドニ候爵は、「夢日記をつけるには、自分が夢を見ているということとを強く意識しないとけない」と言っています。他者の日記を読むときは、この「夢日記」と同じように、陶醉しながらもテキストを俯瞰する冷めた意識をもたなくてはなりません。日記には、小説における虚実とは似て非なる「虚実の皮膜」がある。それを意識して読むことが、日記リテラシーというものなのだと思います。

陶醉のただなかで自己を疑う

『アナイス・ニンの日記』

先ほど紹介した『アナイス・ニンの日記』は、

性愛を蒐集する男、自己愛を投影する女

鹿島 茂

(フランス文学者)



© akvimages/アフロ

1975年ごろのアナイス・ニン。日記のオリジナルは、カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校の図書館に保管されている。



© GRANGER.COM/アフロ

兄エドモン・ド・ゴンクール(左)と、その弟ジュール・ド・ゴンクール(右)。日記のほか、兄弟の共同作品で約30冊の小説や歴史書を公刊した。

原書も邦訳書も複数の版があります。どれも作家・芸術家たちとの交遊関係や恋愛遍歴が記録されていて、アナイスの自己探求の足跡を垣間見ることができますが、なかでも注目すべきなのが『ヘンリー&ジュン』に始まる「無削除版」シリーズです。「無削除版」シリーズは現在五巻(邦訳は二巻)まで出ています。フィリップ・カウフマンによる映画化で第二次アナイス・ニン・ブームを起すことになる『ヘンリー&ジュン』は、刊行当時、読者を大いに驚かせました。「編集版」には登場していなかったアナイスの夫ヒューゴーが突如現れるなど、これまで書かれていなかった事実が明らかになったからです。

「性愛」という観点で見ると、やはりこの『ヘンリー&ジュン』から読むのがいいでしょう。アナイスはまず作家のヘンリー・ミラーと知り合い、作家としての彼の才能に強い尊敬の念を抱きながら、男としての彼の魅力に溺れていきます。しかし、ほぼ時を同じくして彼の妻のジュン・マンスフィールドとも出逢い、ひと目で彼女の虜になってしまったのです。

息を呑むほどの白い顔、燃える瞳。ジュン・マンスフィールド、ヘンリーの妻。庭の

暗がりから、玄関ホールの明かりの中に入った彼女を見て、生まれてはじめて、私は、この地上で、もつとも美しい女性に出逢った、と思った。(一九三一年二月／杉崎和子訳『ヘンリー&ジュン』角川文庫)

やがてアナイスは、ジュンとの会話に出てくる女友達にも嫉妬するほど、彼女に魅了されていきます。

料理店を出るとジュンが言った。「あなたを抱きたかったのに」心残りの響く声だった。タクシーを止めて、彼女をのせる。ジュンを中心に坐らせて車は、走り出そうとしている。身悶えするような思いで、立ちつくす私。「あなたに、キスをさせて」とうとう、そう言っていた。「あたしにも」ジュンが、彼女の唇を呉れた。長い間、私は、その唇を離さなかった。(一九三二年一月／前掲書)

しかしアナイスは、ジュンの美貌に溺れつつも、ヘンリーとの荒々しいセックスにのめり込んでいきます。

私が覚えているのは、ヘンリーの貪欲さ、エ